



適性検査 B

(14 : 50 ~ 15 : 40)

注 意

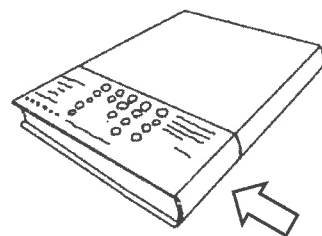
- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の 1 ページから 6 ページに、問題が **1** から **2** まであります。
これとは別に解答用紙が 1 枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

1 ももこさんが所属する図書委員会では、「図書室の本の貸出冊数が少なく、読書離れが進んでいる」ことを改善していくために話し合っています。ももこさんは、本の帯※₁に、読み手の興味をひく効果があることに着目し、本の魅力が伝わる帯を作成することにしました。

次の文章は、ももこさんが選んだ本の一部です。よく読んで、あとの問いに答えなさい。
(設問の関係上、一部省略している箇所があります。)

※1 本の帯＝本の魅力をアピールするために、表紙の一部を覆うように巻かれた紙のこと。「腰巻」とも呼ばれる。
右にある実際の本に示してある矢印部分のこと。



最初は旗だと思った。国旗のような長方形の旗ではなく、三角形のペナントが何枚か並んで、団地の一室のベランダに掲げられている。

少年は自転車に乗っていた。町の探検の途中だった。三月の終わりに引っ越してきて、まだ一ヵ月足らず——通学路からはずれたこの団地に来たのは、初めてだった。

自転車を停める。見上げると、なあんだ、と苦笑いが浮かんだ。旗ではなかった。竿をフェンスに掛けた、小さなこいのぼりだった。

(中略)

初めての転校だった。新しい友だちとどうなじんでいけばいいのかよくわからなかったから、しくじった。最初はよかったのだ。クラスのみんなは休み時間のたびに少年のまわりに集まって、前の学校のことをあれこれ訊いてきた。すっかり人気者だ——と、勘違いしてしまった。気がゆるんだ。質問に答えるだけでなく、なにか面白いことを言って、みんなを笑わせてやろうと思った。前の学校や町のことを少し大げさに話した。この学校やこの町の感想も、ギャグのネタになるようにしゃべった。

(中略)

「そんなに前の学校がいいんだったら、帰れよ、そっちに」——今日、聞えよがしに言われた。言ったのは、少年の話に真っ先に腹を立てたヨッちゃんだった。

男子のリーダー格のヨッちゃんは、好きなテレビやゲームやマンガがどれも少年と同じで、おしゃべりをするときのテンポやノリもぴったりで、クラスでいちばん仲良くなれるはずだった。親友になれたらいいな、きつとなれるだろうな、と楽しみにしていた一週間前までが、いまは、ずっと昔のことのように思える。

知らないうちにうつむいてしまっていた。顔を上げ、こいのぼりをもう一度見つめて、まあいいや、とため息をついて自転車のペダルを踏み込みかけたとき、こいのぼりが一尾、空に泳ぎ出た。

(中略)

竿のあるベランダの位置を外から確認し、廊下に並ぶドアの数と照らし合わせて、奥から二軒目のドアのチャイムを鳴らした。

中から顔を出したのは、おばさんだった。少年のお母さんと変わらない年格好で、お母さんよりきれいで、そのかわり、お母さんより寂しそうに見えた。

こいのぼりが飛んでいったことを説明して、拾ってきたこいのぼりを差し出すと、おばさんはとても——少年が予想していたよりもずっと喜んで、感謝してくれた。

「ちょっと待っててね、お菓子あるから、持って帰って」

玄関の中に招き入れられた。おばさんは玄関とひとつづきになった台所の戸棚を開けながら、「何年生？」と訊いた。

「五年、です」

「……東小学校の子？」

けげんそうに訊かれた。

少年がうなずいて、「転校してきたばかりだけど」と付け加えると、おばさんは、ああそうなの、と笑った。固まっていたものがふっとゆるんだような笑顔だった。

「ねえ、ボク、上がっていきなさい。おみやげのお菓子はあとであげるから、おやつ食べていけば？」

知らないひとの家に上がるのはよくない。お母さんにいつも言われている。

でも、五時のチャイムまではまだ時間があるし、断るとおばさんはまた寂しそうな顔で固まってしまいそうだし、なにより、少年は気づいていた。台所の奥の居間に男の子の写真が飾ってある。大きく引き伸ばした写真をきちんとした額に入れて、鴨居※₂に立てかけて——田舎のおじいちゃんの家では、死んだひいおじいちゃんとひいおばあちゃんの写真をそうしている。そして、部屋に染みついていにおいは、おじいちゃんの家でいつも嗅いでいるのと同じ……たぶん……きっと……。

うつむいて靴を脱ぐ少年に、おばさんは言った。

「せっかくだから、お仏壇にお線香をあげてくれる？」

おばさんの息子は、タケシくんという。三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生——少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、かもしれない。

おばさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。

(中略)

ヨッちゃんの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨッちゃんだったらしい。

「ヨッちゃんと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元気だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨッちゃん、最後まで——いまでもヨッちゃんは、ときどき仏壇にお線香をあげに来てくれるのだという。

「ヨッちゃん、いろいろ面倒見てくれるから、すぐに友だちになれたでしょ」

少年は黙ってうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除するときの手順も、ぜんぶヨッちゃんに教わった。

「そうかあ、ヨッちゃんと友だちかあ……」

おばさんはうれしそうに微笑んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「じゃあ、タケシとも友だちってことだね」

おばさんはもっとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

※2 鴨居＝障子やふすまなどの建具をはめる開口部の上にわたす溝付きの横木。

外からドアが開く。
「おばちゃん！ こいのぼり、黒いのがなくなってる！ 飛んでったんじゃないの！」
玄関に駆け込んできたのは、ヨッチちゃんだった。

五時のチャイムが鳴るまで、少年はヨッチちゃんと一緒にタケシくんの家にいた。おばさんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。

（中略）
ヨッチちゃんと仲直りをしたわけではない。ヨッチちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬、なんでおまえなんかがここにいるんだよ、という顔をした。少年も、しょうがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。

おばさんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さっさと帰れよ」とヨッチちゃんに小声で言われ、肩を小突かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。おばさんに嘘がばれるのが嫌だったし、嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もっと嫌だった。

でも、おばさんはジュースを持って戻ってくると、二人に言った。
「タケシも喜んでるわよ、ヨッチちゃんに新しいお友だちができて」
帰れなくなった。頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままで以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨッチちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。そんな二人を、おばさんはずっと——ほんとうにずうっと、にこにこうれしそうに見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出ても、ヨッチちゃんはなかなか出てこなかった。

（中略）
しばらくたって外に出てきたヨッチちゃんは、真鯉だけをつないだ竿を持っていた。
「すぐ帰らないとヤバイ？」
少年に顔を向けずに訊いた。
「べつに……いいけど」
「片手ハンドル、できる？」
「自転車の？」
簡単だよ、そんなの、と笑った。道が平らだったら両手を離しても漕げる。
ヨッチちゃんはこのぼりを少年に渡した。
「おまえに持たせてやる」
「……どうするの？」
「ついて来いよ。タケシのこいのぼり、ぴんとなるように持ってるよ」
そう言って、自分の自転車のペダルを勢いよく踏み込んだ。
少年はあわてて追いかける。風を呑み込んだこいのぼりは、尾びれまでぴんと張って泳ぎはじめた。意外と重い。しっかりと竿を握っていないと、飛んでいってしまいそうだ。
（中略）

河原に出た。空も、川も、土手も、遠くの山も、夕焼けに赤く染まっていた。
ヨッチちゃんは土手のサイクリングロードに出ると自転車を止め、少年からこいのぼりを受け取った。

「俺ら……友だちなんだって？」
少年は、ごめん、とうつぶいた。おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかった。
「べつにいいけど」
ヨッチちゃんはまたさっきのように笑って、手に持った竿を振ってこいのぼりを泳がせた。
「タケシって……すげえいい奴だったの。サイコーだった。俺、いまでも親友だから」
「……うん」
「でも……おばさん、もう来るなって。ヨッチちゃんは新しい友だちをどんどんつくりなさい、って……そんなのヤだよなあ、関係ないよなあ、俺が友だちつくるのとかつくんないのとか、自分の勝手だよなあ……」
ヨッチちゃんは、悔しそうに竿を振り回す。こいのぼりは身をくねらせ、ばさばさと音をたてて泳ぐ。
（中略）
ヨッチちゃんは、行こうぜ、とペダルを踏み込んだ。
ハンドルが揺れる。自転車が道幅いっぱいには蛇行※3する。片手ハンドルで自転車を漕ぐのは、あまり得意ではなさそうだ。
少年はヨッチちゃんの自転車に並んで、手を差し伸べた。「持ってやろうか」と声をかけると、ヨッチちゃんは少し間をおいて「悪い」と竿を渡した。「べつにいいよ」と竿を受け取ったあと、ほんとうはもっと別の言葉を言わなきゃいけなかったのかもな、と思った。でも、そういうのって、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた。
こいのぼりが泳ぐ。金色にふちどられたウロコが、夕陽を浴びてきらきらと光る。
ヨッチちゃんの自転車が前に出た。少年は友だちを追いかける。右手で、友だちの友だちを握りしめる。振り向いたヨッチちゃんが、「転ぶなよお」と笑った。
（重松 清『小学五年生』『友だちの友だち』（文春文庫）による。）

（問い）
本の魅力が伝わる帯を作るために、あなたがももこさんだったらどのような帯を作成しますか。帯に記載するキャッチコピー※4を考えて書きなさい。また、キャッチコピーに込めた意味や、そのキャッチコピーを作成した理由を作成意図に書きなさい。なお、字数制限はありません。

- ※3 蛇行＝蛇がはうように、まっすぐではなく右や左に曲がりながら進むこと。
※4 キャッチコピー＝相手の心を強くとらえる効果をねらった印象的な宣伝文句など。

2 奏太^{そうた}さんは、夏休みの自由研究で歴史新聞を作成することにしました。現在は、「日本と世界との関わり」というテーマのコラム※[※]を作成するために、奈良時代から江戸時代までの資料を集め、原稿^{げんこう}の準備を進めているところです。

これまでに、奏太さんは4つの資料を集めました。紙面の都合上、集めた資料のうち2つを選ぶ必要があります。

あなたが奏太さんなら、資料1～4のうち2つを用いてどのようなコラムを作成しますか。次の(条件)にしたがって、解答用紙の書き出しの文章に続くよう、あなたが考えた原稿を書きなさい。

(条件)

- ・解答用紙の所定の欄^{らん}に、あなたが選んだ資料の番号をそれぞれ書くこと。
- ・選択した2つの資料について、読み取れる内容とその時代の特徴^{とくちょう}を書くこと。
- ・あなたが考える「日本と世界との関わり」を、選択した2つの資料から読み取れる内容を関連付けて書くこと。

※1 コラム＝新聞や雑誌^{ざっし}で、あるテーマについて書かれた短い意見や感想。

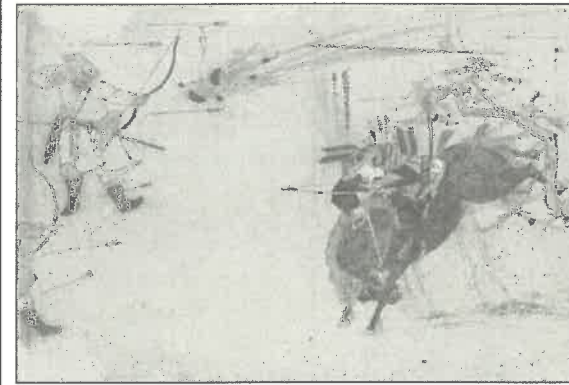
資料1【奈良時代の瑠璃^{るりのつき}杯とこの時代に関するメモ】



(正倉院^{しょうそういん}のホームページによる。)

- 「瑠璃」とはガラスのことを指しており、この瑠璃杯の高さは11cmである。
- この瑠璃杯は、西アジアで作られたと考えられている。
- このころの中国は、シルクロードを通じて、西アジアやヨーロッパとの交流が盛^{さか}んだった。
- 中国の僧鑑真^{そうがんじん}は、何度も航海に失敗しながらも日本にわたり、仏教を発展させた。

資料2【鎌倉時代の『蒙古襲来^{もうこうしゅうらい}絵詞』とこの時代に関するメモ】



(文化遺産オンラインのホームページによる。)

- モンゴルが元という国をつくって中国を支配し、日本も従^{したが}えようと使者を送ってきた。
- 「てつほう」という新兵器や集団戦法を用いた攻撃に、御家人^{ごけにん}たちは苦しんだ。
- 元軍は、暴風雨にあうなど、2度とも大きな損害を受けて引き上げた。
- 竹崎季長^{たけざきすえなが}という御家人が、戦いの様子や土地をもらう事情などを描かせた資料である。

資料3【戦国時代の『南蛮屏風^{なんばんびょうぶ}』とこの時代に関するメモ】



(神戸市立博物館のホームページによる。)

- ヨーロッパの国々は、キリスト教を広めたり貿易をしたりするため世界に進出した。
- この資料は、鉄砲^{てっぽう}や火薬、生糸^{きいと}がもたらされた貿易の様子を描いている。
- 長崎や平戸、堺^{さかい}などの港を中心に貿易が行われた。
- この時代には、スペインやポルトガルが力を強めていた。

資料4【江戸時代の絵踏みの様子^{えふみ}とこの時代に関するメモ】



(シーボルト『日本』による。)

- 江戸時代の初めまでは、外国との貿易に力が入れた結果、日本町が東南アジアの各地にできた。
- 江戸幕府^{ばくふ}は、キリスト教を禁止し、信者を取りしめるようになった。
- この資料は、キリスト教信者でないかどうか確かめる様子を描いている。
- 徳川家光が将軍^{しょうぐん}のとき、島原・天草で約3万7000人が一揆^{いっぎ}を起こした。